

〈研究ノート〉

パスカルの恩寵論の源泉*

森 川 甫**

I. アウグスティヌスとパスカル

恩寵論のもっとも基本的な問題である恩寵と自由意志において、アウグスティヌスがパスカルに与えている影響をみてゆきたい。パスカルにとっては、ジャンセニウスにとってと同様、アウグスティヌスの恩寵は、とりわけ、「喜び」*délectation* という特徴を持っている。パスカルはこの概念を支えるアウグスティヌスの多くの言葉を翻訳している¹⁾。

(聖アウグスティヌス『罪の報いと赦しについて』第2巻17章1、2節)「私たちはみな、善き業を企て、実行し、完遂することが時にはできるが、時にはできないこともある。そうすることによる喜びを時には感じるが、時には感じない。これは、そうできるのも、このような喜びを感じるのも、自分の力によるのではなく神の賜物によることを私たちが知るためであり、また、このようにして傲慢から癒され、『主は喜びをお与えになり、私たちの地は実りをもたらします』といわれているのがいかに正しいかを知る」ためである。この1節において、聖アウグスティヌスが、何らかの善き業を果たす力が私たちのうちにありと確言しているのナ、明らかではないでしょうか。なぜなら、彼は善き業を果たすことによって得られる喜びが、つねに私たちのうちにあるわけではない、それは私たちに高ぶらないことを教えるためであると述べていますが、この言葉は、もし私たちがその善き業を果たす近接的能力を有するならば、本当ではなくなってしまうからです。」(手紙

三)²⁾

この恩寵が聖霊によって心のなかに広げられると、神の律法に何よりも引かれ、これを喜ぶ思いだけに満たされる。この恩寵が邪欲に対抗できるだけでなく、はるかにこれに勝ったものであって、「意志を満たされると、情慾によって悪に喜びを抱いていた時よりも、はるかに強い喜びを善に対して抱くようになる。こうして、自由意志は、聖霊が吹き込む甘美さと快楽とに罪の魅力以上に惹かれ、自ら確実に神の律法を選ぶ。」(論考三)³⁾とパスカルは言う。

このように、アウグスティヌスの恩寵論の特徴である「喜び」*délectation* にパスカルはまったく忠実である。パスカルは、アウグスティヌスの『ガラテヤ書解説』により、次のように書いている。

「この偉大な聖人によりますと、神は、天上の心地よさを与えて人の心を変えさせ、心に満ち溢れるこの心地よさが、肉の歓楽をも乗り越えさせ、やがて人間は、一方に自分の死と虚無とを感じながら、他方では、神の偉大と永遠とを見出し、朽ちぬ幸いから自分を引き離す罪の快楽に嫌悪を覚え、神のうちに最大の喜びがあるのを知って惹きつけられ、自分の方から、まったく自由で、自発的で、愛に促されて動き、間違いなく神のもとへと向かって行くようになるというのです。」(「第18の手紙」)⁴⁾

神からこの恩寵を与えられる人々は、自分たちの方から、自由意志を用いて被造物よりも神の方を間違いなく愛する方向へと向かって行く。自由意志は、実際に、神を愛する方向へと向かうのだ

*キーワード：パスカルの『恩寵論』、アウグスティヌスの教説、カルヴァンの教理

**関西学院大学社会学部教授

1) SELLIER Philippe, *op. cit.*, pp. 329-333.2) OCM, III, *Écrit sur la Grâce, Lettre* [3] 22. cf. 『MP 全集』 pp. 93-94. OCL, p. 328. cf. 『P 著作集』 V, p. 210.3) OCM, III, *Écrit sur la Grâce, Discours* [3] 13. cf. 『MP 全集』 pp. 204-205. OCL, p. 318. cf. 『P 著作集』 V, p. 179.4) 18^e *Lettre*, OCL, p. 159. cf. 『P 著作集』. V, p. 216.

から、この恩寵の助けを借りて、自分の方から神の方へ向かって行くといえる。あるいはまた、恩寵が与えられるとき、その度ごとに自由意志は神の方へと間違いなく導かれるのだから、この恩寵が自由意志を導いているのだともいえるとパスカルは言う⁵⁾。

パスカルは「人間のよき意志」と「神の賜物」の関係の概要を、アウグスティヌスに則して、次のごとく示している。

「人間は、決して神に先立つことはないとか、「人間はよき意志が、神の賜物よりもはるかに先に立つ」(聖アウグスティヌス『エンキリディオ』32章)などを引用した後に、パスカルは「後の方の文章が取り出されてきた場所で、聖アウグスティヌス自身が、明快すぎるくらいに明快に、その解明を与えてくれているからです。」(「手紙四」)⁶⁾

「人間の善き意志は多くの神の賜物に先行するが、そのすべてに先行するわけではない。善き意志そのものが先行することのない賜物、善き意志はそのような賜物のひとつななである。事実、そのどちらのことも聖書に記されており、『神の憐れみは私に先立つでしょう。』とも、『その憐れみは私を追う。』ともある。神は、欲しない者には先立ってその人を欲するようにさせ、欲する者には後に続いてその人が空しく欲しないようになさるのである」。(手紙四)⁷⁾

このように種々さまざまな表現が出てくる真の原因は、われわれの善行にはすべて、二つの源泉があるからであり、そのひとつは、われわれの意志、もうひとつは、神の意志であると、パスカルは指摘し、アウグスティヌスを引用している。

「神は私たちを待たずして、私たちをお救いになることはない」し、「私たちは、欲しさえすれば、神の律法を守るであろう」し、「救いに備するのにも備しないのも、私たちの意志の在り方次第である」からです。ですから、ある聖人がなぜ救

われるのかと問われたならば、その人が救いを欲したからだと言ってよいし神がその人の救いをお望みなったからだと言ってもよいのです。というのは、もしその人と神とのどちらか一方が欲しなければ、救いは成就しなかったでしょうから。けれども、[人間の意志と神の意志という]この2つの原因が協力して救いという結果を生んでいるにしても、その協力の仕方にはたいへんな違いがあります。というのは、人間の意志が神の意志の原因ではないのに対し、神の意志は人間の意志の原因であり、源であり、始源であって、人間のうちにこの意志を生じせしめるからです。したがって、行為を人間の意志と神の意志のいずれにも帰することができるという点で、これら2つの原因が行為を生むにあたって対等に協力しているように見えますが、しかしそこには、実はたいへんな違いがあります。つまり、人間の意志を除外して神の恩寵のみに行為を帰することはできても、神の意志を除外して人間の意志にのみ行為を帰することは決してできません。」(手紙四)⁸⁾

その行ないがわれわれの意志からきているといわれる時、人間の意志は2次的な原因とみなされているので、1次的原因とみなされているのではない。しかし、第1原因を求める時には、ただこれを神の意志だけに帰して、人間の意志は除外されるとパスカルは言う⁹⁾。

「聖パウロは『私は彼らの誰よりもよく働いた』と言った後、『それは私ではない』と、すなわち、『私が働いたのではなくて、私とともにいます主の恩寵が働いたのである』とつけ加えている。彼が自分の働きを自分の意思に帰したり、また自分の意思に帰すまいとしているのが見られるが、それは、その働きの2次的な原因を求めるか、第1の原因を求めるかによって違って来るからである。しかし、あくまで、自分ひとりに帰すことはない。これに反して、恩寵だけに帰すことはしている。厳密に言うなら、恩寵だけに帰している」と

5) OCM, III, *Écrit sur la Grâce, Traité*, [3] 14. cf. 『MP全集』p. 205. (論考三) OCL, p. 323. cf. 『P著作集』V, pp. 169-170.

6) OCM, III, *Écrit sur la Grâce, Lettre* [4] 1. cf. 『MP全集』p. 97.

7) OCM, III, *Écrit sur la Grâce, Lettre* [4] 2. cf. 『MP全集』p. 97. OCL, p. 328. 『P著作集』V, p. 191.

8) OCM, III, *Écrit sur la Grâce, Lettre* [4] 3. cf. 『MP全集』pp. 97-98. OCL, p. 323. 『P著作集』V, pp. 191-192.

9) Cf. OCM, III, *Écrit sur la Grâce, Lettre* [4] 4. cf. 『M全集』p. 98. OCL, p. 323. cf. 『P著作集』V, p. 192.

言ってもよい。そこで彼は、『生きているのは、私ではない。私のうちにおられるキリストである』。すなわち、『私は生きている』と言いながら、『私生きている』とつけ加えている。つまり、生命が自分のものであるということも、自分のものでないということもどちらも真実なのであるが、それは、1次的原因を指し示そうとするか、2次的原因を指し示そうとするかによって、違ってくる。しかし、厳密に言うなら、彼はこの生命をイエス・キリストに帰すことはあっても自分だけに帰すことは決してない。」(「手紙四」)¹⁰⁾

「さて、このことが、こういう表面上の諸矛盾が起こってくるもとなのです。み言葉は肉となられて、神と人間とを、力と弱さをひとつに結ばれたわけですが、それが原因で、恩寵のわざのうちにもこういう諸矛盾が起こってきたのです。」(手紙四)¹¹⁾

「ですから、今後は、聖アウグスティヌスのなかにも、聖書にあるのと同じ表面上の諸矛盾が見出されても、お驚きになることはありません。」とパスカルは述べている¹²⁾

ジャンセニウスやジャンセニストたちは、人間は実際に、刺激を与えるだけで、効果をもたらさぬといわれるこうした弱い恩寵に逆らうこともあって、ここから善への促しを受けても実行はしないものだというだけでなく、彼らはまた、カルヴァンに反対して、「意志が有効で不動の恩寵に逆らう力を持つことをしっかりと唱えて譲らない」し、また、モリナに反対して「意志に及ぼす恩寵の力をも固く守り抜こうとしている」。この2つの真理のどちらにも強く心を寄せていればこそだと、パスカルは言う¹³⁾。

ジャンセニストは、人間にはその本性上、つねに罪を犯し、恩寵に逆らう可能性があること、墮落の後には、欲望の悪い根が宿って、その可能性が限りなく増大したこと、しかしながら、神がみ心により、憐れみをもって、人間の心を動かそうとなさる時には、神は、望みどおりのことを、望

みの仕方、行なわれるということ、知りすぎること、働かざるが故に生まれるが故にそなわぬ人間の自由を何ら損なわれることはなく、ひそかな、驚嘆すべき方法でこの変化を行なわれるのです。その方法がどんなものかは、聖アウグスティヌスがとても見事に説明した。有効な恩寵に敵対する者たちは、自由意志に対する恩寵の至上の力と、恩寵に逆らいうる自由意志の力とのあいだに、さまざまな矛盾対立があるものと、勝手に想像していますが、こうした方法によれば、それらはすべて消え去るのです。この問題については、歴代の教皇も教会も聖アウグスティヌスを規範とするように勧めてきました。この偉大な聖人によると、神は、天上の心地よさを与えて人の心を変えさせ、心に満ち溢れるこの心地よさが、肉の歓楽をも乗り越えさせ、やがて人間は、一方に自分の死と虚無とを感じながら、他方では、神の偉大と永遠とを見出し、朽ちぬ幸いから自分を引き離す罪の快楽に嫌悪をおぼえ、神のうちに最大の喜びがあるのを知って惹きつけられ、自分の方から、まったく自由で、自発的で、愛に促されて動き、間違いなく神のもとへと向かって行くようになるという。そうならば、神から離れるのは、人間にとって苦しみ、苛責とも感じられることであろう。それは、必ずしも神から遠ざかることができなからではない。望むならば、実際に遠ざかることもできる。しかし、意志は自分にとって一番好ましい方にしか、決しておもむかないし、今この時、すべての幸いを内に含むこのまたとない唯一の幸いほどに、何も好ましいものはないので、どうして、神から遠ざかりたいなどと思うだろうか。「私たちが、自分をもっとも喜ばすものによって行動することは決まっているのだから」と聖アウグスティヌスも言っている。

「このように、神は、人間の自由意志を思いのままに動かされるのですが、あくまで無理強いなさることはなく、また自由意志も、いつでも恩寵

10) Cf. *OCM*, III, *Écrit sur la Grâce, Lettre* [4] 4. cf. 『MP全集』 p. 98.

11) Cf. *OCM*, III, *Écrit sur la Grâce, Lettre* IV, 5. cf. 『MP全集』 p. 98.

12) Cf. *OCM*, III, *Écrit sur la Grâce, Lettre* [4] 6. 『MP全集』 pp. 98-99. Cf. *OCL*, pp. 323-324. 『P著作集』 V, pp. 192-193.

13) Cf. *18^e Lettre OCL*, pp. 358-359. 『P著作集』 V, p. 215.

に逆らうことができるのに、必ずしもつねにそうすることは望まず、神がその靈感を効果的に働かせて心地よく引き寄せられる時には、間違いなく、そして自由に、神の方へと向かって行くのです。」

これこそが、聖アウグスティヌスと聖トマスとの神聖な原則であって、これによるなら、まさに、カルヴァンの意見とは反対に「恩寵に逆らいうるし、しかしまた、教皇クレメンス8世が恩寵問題審議聖省あての文書中で言われたように、「聖アウグスティヌスによれば、神は、私たちの意志の動きを私たちのうちに惹き起こされ、ご自身がその至上に権威によって天の下の他のすべての被造物に対してと同じく人間の意志に対しても及ぼされる支配力によって、私たちの心を効果的に導きになる』ことも真実なのだ」とパスカルは言う。

自分で行動する時にも、この原則に従っているからこそ、「私たちは、カルヴァンのあやまりに反して、まさしく、私たち自身の功績と言いうるものを持てるのですし、しかもやはり、神は、私たちの行動の第1原因であり、聖パウロも言ったように『み旨にかなうことを私たちのうちに行なって下さる』ので、トリエント公会議も告げるように、『私たちの功績は神の賜物である』のです。」

この点からして、同じ公会議が断罪したルターの不信仰の言葉、すなわち、「我々は、無生物と同然のものとして、自分の救いにはまったくあずかることがない」は、打ち破られる。また、この点からして、自分の救いのわざにおいて、恩寵と協力できるようにするのが恩寵それ自体の力であることを認めまいとするモリナ派の不信仰も打ち砕かれる。モリナはこのように言って、聖パウロが打ち立てられた「私たちのうちに意志を惹き起こさせ、行動へと至らせるのは神である」という信仰の原則を無にしている。最後に、この方法によって、ひどく対立していると見える聖書中の次のような章節もすべて一致することになる。「あなたがたは神に立ち返れ」、「主よ、我らをあなたに帰らせて下さい」、「あなたがたのすべての不義

を捨て去りなさい」、「神はご自分の民の不義を取り去られる」、「悔い改めにふさわしいわざを果たせ」、「主よ、あなたは我々のうちに我々のすべてをなし遂げられた」、「新しい心と新しい霊とを自分でつくれ」、「私は新しい霊をあなたがたに与え、新しい心をあなたがたのうちに作る」などである。

私たちの善いわざが、あるいは神のものであるとし、あるいは私たち自身のものであるとしている、一見して矛盾したこれらの表現を一致させる唯一の方法は、聖アウグスティヌスも言われたように、「私たちの行動は、それを生み出すのが自由意志であるから、私たち自身のものであり、また、自由意志がそれらを生み出すようにするのは恩寵であるから、神のものである」と認めることである。「彼らが願わないかもしれないことを、願うようにさせられるのは、神である」¹⁴⁾。

以上のごとく、「第18の手紙」において、パスカルは神の恩寵と人間の自由意志の基本的な関係を示しているが、さらに、次のごとく、1) 神の全能と人間の抵抗、2) 恩寵の働き「間違いなく」、3) 恩寵、功績、祈りの項目にまとめてパスカルの所説を検討する。

1) 神の全能と人間の抵抗

パスカルの神は人間の主権者であり、人間の意志に働きかけ、人間とともに働く¹⁵⁾。パスカルは、アウグスティヌス『恩寵と自由意志について』17章を引用している。

「いったい、神の方からお始めになって、私たちが望むように働きかけられるのである。神ご自身が、望む者たちに力を合わせ、ご自身のみわざを完成しようとなさるのである。そこで、使徒も『あなたがたのうちによいわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれらを完成してくださるにちがいないと確信している』と言ったのである。だから、神が、私たちが待たずに、私たちが望むようになるために、働きを始められるのである。そして、私たちが、望んで実行し始

14) Cf. 18^e Lettre, OCL, pp. 359-361. cf. 『P 著作集』V, pp. 215-218.

15) SELLIER, Philippe, *op. cit.*, 340.

めるなら、神は私たちとともに働かれる」。 (手紙三)¹⁶⁾

しかし、パスカルは上に引用したアウグスティヌスの説明にとどまらない。彼は、「カルヴァンに反対して、人間の意志が有効な恩寵に逆らいうる能力を持つこと」を支持している。これは何を意味するのであろうか。アウグスティヌスの弟子であるパスカルは、もちろん、創造された人間の意志が全能の神に勝ることがあろうとはまったく考えていない。彼はただ、カルヴァンとの相違点を強調しているのである。つまり、自由意志は死んではない。生来、選択の能力を持っていると述べて、カルヴァンとの違いを示そうとしているのである。しかし、彼の目には、その能力は、墮落後、非常に弱くなっており、ただ、神の恩寵のみが、善に向かう自発性を回復するのである。パスカルは「種々さまざまな能力を考察するいろいろな仕方」を区別しているが、次に、このような仕方によって、人間の能力を考察している。

「神の道を完全に歩ませるには、必要分よりは少ない」とはいえ、恩寵の助けを得ている人については、もしどんな助けも得ていないなら持っているはずのない能力を持っているということが出来る。なぜなら、自分に必要なものを一部だけでも持つことは、全然持たないよりも、完全に持つことに近いからである。それに、この不完全な助けも、罪の誘惑が大きく、助けの必要が痛感される時にはひどく弱々しいものに思われるにせよ、誘惑が小さくなれば、相応に力強いものとなり、実際に誘惑を乗り越えさせてくれるはずである。もし全然助けがなかったならば、それだけのことも起こらないであろう。」

「さて、このように、能力が種々さまざまならば、それらを考察する仕方にもいろいろある。これらの能力はいずれも正真正銘のものであるが、その中でただひとつだけが、まったく、十分な、完全な能力と呼ばれ、行動するにあたって他に何一つ必要としないものである。したがって、ある

種の助けを欠いていて、それがないため、ついにある種の行動ができないであろうと目される人々に関して、この意味で、彼らはその行動のための能力を持たぬといっても間違いではない。」 (『叙論二』)¹⁷⁾

「だから、闇の中にいる人は、それなしには行動のできない、十分で、最終的な能力という観点から見ると、見る能力がないといえることは確かである。」 (『叙論二』)¹⁸⁾

「このように、ある人が、どんなに義人であっても、十分に強力な恩寵に助けられなかったならば、すなわち、公会議の用語を使うなら、『神の特別な助け』によって助けられなかったならば、堪え忍ぶ能力は持たないことは、同じ公会議の言うところでも真である。」 (『叙論二』)¹⁹⁾

「第2の手紙」では、目のイメージの代わりに、「盗賊に襲われて瀕死の重傷を負った旅人」のたとえ話を展開している。そして、パスカルは残っている「力」の語の意味を混同している2人の医師をを嘲笑している。瀕死のこの旅人に「家に帰りつける」と言う。その理由をたずねると、「あなたはまだ、両方の足が健全だからです」と答えている。一方、正しい医者とは、「傷口を調べて、致命傷だと診断し、消えゆく命を呼び戻すには、ただ神だけがよくなさることだと宣告している。ここで重要な点は、「瀕死の重症であるが、(カルヴァンに反して) 死んではないと言う点である。」²⁰⁾というセリエ教授の指摘は、パスカルの恩寵論の一つの特色を確かに指摘している。

自由意志の能力は、パスカルが争う相手によって、つまり、モリニストに対しては、とるに足らぬものと言い、カルヴィニストに対しては、現実にあるものと表現されるのである。

「それならば、神父さま、彼 [ジャンセニウス] が、人は恩寵に逆らう力があると主張しているかどうかをお調べ下さい。いくつもの論考の中で、

16) OCM, III, *Écrit sur la Grâce, Lettre* [3] 6. cf. 『MP全集』 pp. 87-88., OCL, p. 326. 『P著作集』 V, pp. 203.

17) OCM, III, *Écrit sur la Grâce, Discours* [2] 65. cf. 『MP全集』 p. 151.

18) OCM, III, *Écrit sur la Grâce, Discours* [2] 66. cf. 『MP全集』 p. 151.

19) OCM, III, *Écrit sur la Grâce, Discours* [2] 67. cf. 『MP全集』 p. 151. OCL, pp. 326-327. 『P著作集』 V, pp. 279-280.

20) SELLIER, Philippe, *op. cit.*, 343.

特に、第3巻8書20章において、彼はこんなふう述べているのですけれどね。『公会議に従うと、人はつねに恩寵に逆らう力を持つ。自由意志は、つねに働くことも、働かないこともでき、望むことも、望まないことも、同意することも、同意しないことも、善事をなすことも、悪事をなすこともできる。この世にあって人間は、つねにこの2つの自由を持っており、あなたがたはこれを、相反性とも、矛盾とも呼んでいる。』同様に、彼は、あなたご自身が指摘しておられるような、カルヴァンの誤りには反対していないかどうか、調べてください。彼は、21章全体を通じて、このように教えているのです。『教会はこの異端者を断罪した。この異端者は、有効な恩寵が自由意志に対して、長い間教会で信じられてきたような具合には働かないのだと、つまり、自由意志にはそのあと、同意するかしないかの能力があるとは言えないのだと、主張したのである。これに対して、聖アウグスチヌスと公会議とによれば、人はつねに、望むならば同意しないでいられる力を持つのである。』...そして、ついには、4章では次のように断言しているのですが、これはトミストと同じ意見ではないかという事を考えていただきたいものです。「トミストたちが、恩寵の効力をこれに逆らいうる力と調和させようとして書き著したものはすべて、自分の言いたいところと一致するから、この点についての自分の考えを知るには彼らの本を読んでもらうだけでよい。彼らの言った事は、私の言った事とってほしい」。(「第18の手紙」)²¹⁾

以上のように、パスカルは、アウグスティヌス、トマス、ジャンセニウスが同じ立場であることを強調している。

2) 恩寵の働き—「間違いなく」

神から恩寵を与えられる人は神の方へと、与えられない者は悪の方へと「間違いなく」*infailliblement* 向かって行く。

「神からみ心によって、この恩寵を与えられる人々は、自分たちの方から、自由意志を用いて、被造物よりも神の方を間違いなく愛する方向へと向かって行く。(…)あるいはまた、恩寵が与えられる時、そのたびごとに自由意志はこちらの方へと間違いなく導かれるのだから、この恩寵が自由意志を導いているのだともいえる。そして、み心によって神から、この恩寵を終わりまで与え続けられる人々は、そのまま間違いなくずっと神の方を愛し続けることができる。こうして、神の律法の方にもっと大きい満足をおぼえるため、律法を破るよりも、律法を守り続けることを好み、自分自身の意志で死に至るまでそのようにし続けて、ついには栄光に入れられる資格を得る。それは、欲情を乗り越えさせてくれる恩寵の助けがあったからであり、また、自分自身が選び取り、自分の自由意志が、おのずと自発的に自由にそちらの方へとおもむいたためでもある。」(「論考三」)²²⁾

「ところが、この恩寵を与えられない者たち、あるいは終わりまでずっと与えられないままにいる者たちは、あいかわらず自分たちの欲情に心地よく揺さぶられ、たぶらかせつづけるので、罪を犯すまいとしても、間違いなく罪を犯すほうへと傾く。それというのも、罪を犯すほうにもっと大きい満足をおぼえずにすまないからである。こうして、彼らは、罪のうちに死に、永遠の死を与えられるに価する者となる。自分たち自身の自由な意思で、悪を選びとったのだからである。(「論考三」)²³⁾

それゆえ、パスカルにとっては、「間違いなく」*infaillibilité* と「自由」*liberté* とは、互いに排除しない。アウグスティヌスのよき弟子であるパスカルは、善、あるいは、悪への傾向が自発的に行われる自分の意思の領域と、あれこれの選択を自由意志に行わせる強制の領域を区別している。「人間は必然的に、逃れようもなく、罪を犯さずにはいられない者である」。*les hommes sont contraints nécessairement et inévitablement*

21) 18^e Lettre, OCL, pp. 363–366. cf. 『P 著作集』V, pp. 221–222.

22) OCM, III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [2] 15. cf. 『MP 全集』p. 205.

23) OCM, III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [2] 16. cf. 『MP 全集』p. 205. OCL, p. 318. 『P 著作集』V, pp. 169–170.

pécher. (『論考三』)²⁴⁾と言うルターを非難している。強制 *contrainte* だけが、パスカルの拒否する唯一の用語ではない。そのあいまいさのゆえに 必然 *nécessité* もパスカルは避けている。彼は、第1原理への意志の服従、自然的秩序における幸福の願望、永遠の秩序における至福への同意を指すためにのみ、意識的に用いている。これらの場合、自由意志は、そのために創造されたのではあるが、幸福、あるいは、至福におもむく力を持っていない。事実、すべての人は、神を模索し、限られた幸福を通して、至福を限りなく求めている。それゆえ、人間には、未知の超越神に必然的に向けられている本性的な愛が存在する。キリスト教徒の幸福全体は、神を見出すことから来る。そして、この弱い愛を熱い、自発的な愛 *charité* に変える。「彼らの意志の、完全な自由と乗り越え難い傾きでもって、かならず愛さねばならないかたを完全に、そして、自由に愛する人々は、なんと幸いなことでしょう」²⁵⁾。

しかしながら、「必然 *nécessité* という語は、間違いないこと *infaillibilité* と呼ぶ方がふさわしいものを強調するために、かなりしばしば用いられてきた。とくに、アウグスティヌスの場合がそうである」とセリエ教授は指摘している。しかし、宗教改革が起こり、そして、死んだ、石のような自由意志という理論を作り上げるため、これらの用語、表現をよりどころとした。それゆえ、以後、議論の種になるこれらの表現は正確な定義なしには用いることができない。パスカルはこのように、宗教改革の思想を意識しつつ、この区別を設ける努力をしているのであるが、このことは逆に、自由意志と恩寵、あるいは、人間の堕落とその救いに関して、パスカルの思想が、宗教改革の思想にいかにも類似するものであるかを予感させるものである。

「ところが今は、欲情のため、悪にこよなく引かれ、悪を楽しむ気持ちが強くなって、悪が自分の幸いであるかのように、どうしようもなく悪へ

向かい、悪こそは最高の幸福を感じ取れる対象であるかのように、好きこのんで、まったく自由に、喜び勇んで、悪を選び取っているありさまである。」(『論考三』)²⁶⁾

「すべての人間がひとしく、このように永遠の死と神の怒りを受けるに価する、腐りきった群れに属しているのだから、神が義をもってすべての者を、憐れみもなく滅びへと渡されたのは当然であった。しかしながら、神はみこころによって、ひとしく腐りきったこの群れ、ただ悪行しかみられぬこの群れから、若干数の人々、性別、年齢、身分、性格、国籍、時代などもさまざまの、要するにありとあらゆる種類の人々を、選び出し、引き離す事になさった。」(『論考三』)²⁷⁾と述べて、神の選びの教理にパスカルは同意している。

3) 恩寵、功績、祈り

聖書には、救いは、ときには、すべて神によるという表現があり、また、ときには、人間に、彼の祈りに、彼の功績に帰しているような表現が見出される。恩寵の神学におけるこの重要な問題にパスカルは取り組んでいる。

「キリスト者のありようをじっくりと見つめてみましょう。聖アウグスティヌスによれば、それは聖なる望みとしか言いようのないものだそうですが、私たちは、神が人間に先立たれることがあるかと思えば、人間が神に先立つことがあることもわかります。神は、とくに求めもしなくても与えてくださることもあり、求めるものだけをお与えになることもあります。神は人間の協力がなくても働かれることがあり、人間が神と協力することもあります。神の方からまず、離れて行かれることがあり、人間の方から、先に離れることもあります。神は、人間を待たずに、人間を救うことはできませんが、それは何も、意思をもって努力する人間によるのではなく、ただ、憐れみをたれてくださる神によることなどです。」(『手紙 II』)⁴⁰⁾¹⁾

24) OCM, III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [3] 10. cf. 『MP全集』 p. 203. OCL, p. 340. 『P著作集』 V, p. 253.

25) 『病の善用を神に求める祈り』 *Prière pour demander à Dieu le bon usage des maladies*, OCL, p. 363.

26) OCM, III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [3] 10. cf. 『MP全集』 p. 203.

27) OCM, III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [3] 11. cf. 『MP全集』 pp. 203–204. OCL, p. 318. 『P著作集』 V, p. 168.

1) *Lettre* [2] 40, 『MP全集』 p. 83. OCL, p. 323. cf. 『P著作集』 V, p. 189.

「半ペラギウス派はアウグスティヌスの教説に反対して、人間の主導性を表現している聖書のすべての章句を用いることができると信じた。しかし、実際には、神の全能を表現するはるかに多くの聖書の言葉を説明できなくなった。アウグスティヌスにとっては、救い全体は神がある人々を正しいご計画によって、代償なしに行われるものであるが、人間にとっては知ることのできないものである。救いは、ただ神による。栄光は無償で与えられる。栄光は、自分から望んで、そのために奔走する人から来るのではなく、ただ、憐れみをたれる神から来る。(私たちが救われるのは)行ないによるのではなく、召しによる。神は、そのみ心のままに、意思を働かせ、行動される。律法は、必ずしも、いつも可能なものではない。恩寵は、すべての人に与えられてはいない。すべての人間が、救われるとは限らない。自分たちがそれを望まないからではなく、神がお望みにならないからである。私たちが神にあって行なうわざはすべて、神ご自身が私たちにあって行なわれるのである。」(「手紙2」44)²⁾

しかしながら、恩寵による救いは、最終的には神の意志によると言いながらも、アウグスティヌスは人間的な原因の介入の可能性を認めている。つまり、神の恩寵が第一にあり、人間が神の召しに答えるというのである。パスカルは、この問題に関しては、アウグスティヌスの忠実な弟子であるトマス・アキナスの説明に同意して、次のように述べている。

「聖トマスが、無償の救霊予定について語ったさい、——この点については、あなたがたにもご異存がないようですが、——これを全体として見ることも、個々の結果において見ることもできるから、2通りの相反したやり方で語ることができると言ったときも、やはり同じことを言ったのではないのでしょうか。結果においてみるならば、いくつかの原因をあげることができます。第1のものは第2のものの効果原因であり、第2のものは、第1のものの目的原因です。しかし、これらを全体としてひっくり返してみるとときには、神の意

思のほかにはどんな原因もありません。すなわち、聖トマスの説明にもあるように、恩寵は栄光を得させるために与えられ、栄光は、恩寵によってこれを得るにあたいする者とされたから与えられるのです。しかし、栄光と恩寵の賜物とをいっしょにして見れば、神の意思のほかにはどんな原因もありません。」(「手紙2」39)³⁾

パスカルは、アウグスティヌスによって、人間の功績の大きな源泉は祈りであり、さらに、聖人の生活全体は、祈りに帰着し、そして、信仰と同じく「祈り自体が神の賜物のなかに含まれている」と理解している。

〔聖アウグスティヌスにおいては、次のことは不変の原則です。すなわち、すぐれた行ないが、神の賜物であるばかりか、——今では、このことを疑うような人は、誰もいません、——祈りも、また信仰も、——この二つは、人が神につながる上に、なくてはならぬ最小のものであり、これがなくなれば、確実に神を離れ去るようになるものなのですが、——やはり、恩寵の賜物、恩寵の結ぶ実、その所産であって、恩寵がはっきりと働きかけて下さらないかぎりには、何人のうちにも見出されることはないというのです。もし私たちに、このことが見えてきますならば、もうそれだけで十分、祈りをなさしめる恩寵によらなければ、人は決して祈ることはできないことを明らかにするものではないでしょうか。〕(「手紙II」9)⁴⁾

神の賜物であり、また、人間の功績であるこの祈りに関するパスカルの思索は、アウグスティヌスを忠実に引用、参照して、『恩寵文書』において示されている。「聖アウグスティヌスはじめ教父たちすべてが、祈りはつねに、有効な恩寵の結ばせる実であるとはっきり断言している以上、この全員一致の断言から必然的に、祈りを持たぬ人は、祈るための近接能力を持たないのだという結論が出てきます。そこで、祈らない人々はみな、祈るための近接能力を持たないのだということを明らかにしたいのなら、祈る人々はみな、有効な恩寵によって祈るのだということを示せば足りません。そして、まさにこのことを、私たちは、聖ア

2) *Lettre* [2] 44, 『MP全集』p. 84. *OCL*, p. 323. cf. 『P著作集』V, p. 190.

3) *Lettre* [2] 39, 『MP全集』p. 83. *OCL*, pp. 322-323. cf. 『P著作集』V, pp. 188-189.

4) *Lettre* [4] 9, 『MP全集』pp. 112-113. *OCL*, p. 329. cf. 『P著作集』V, p. 215.

ウグスティヌスの全体のうちに見てとるのであって、恩寵についての彼の著作は全部、ほとんど1冊の例外もなく、このために書かれたものなのです」(「手紙VI」9)⁵⁾

II. アウグスティヌスとカルヴァン

1) 2つの相反する教説

パスカルは『恩寵文書』において、モリナやモリニストの説、カルヴァンやカルヴィニストの説を相反する2つの説としてとらえている。

モリニストたちにとっては、「神は、ひとしく彼らのすべてを救おうとの意志を持っておられる。他と分け隔てせず、全体に及ぶが、しかし条件づきで救おうとの意志を。救われるためには、彼らは、ただそれを望みさえすればよい。神がイエス・キリストの奇跡によってすべての人に与えておられる〈十分な恩寵〉を活かして、救いを望むか、望まないかを、自分たちの自由意志に決めさせさえすればよい。だから、救われる者があり、救われない者があるということは、神の絶対的な意志によることではなく、ただ、人間の意志によることである。」(「論考一」1)¹⁾パスカルはモリニストの誤りは、「救われる者があり、救われない者があるということは、神の絶対的な意志によることではなく、ただ、人間の意志によることである」という、まさにこの点にあると指摘している。

カルヴィニストたちにとっては、「神は、アダムにおいて人間を創造なさった時、その一部を救い、他を地獄に落とそうとの絶対的な意志を持っておられたが、それは何らかの功績のあるなしを予知される以前に決められていることであつた。そのため、神は、アダムに罪を犯すようにしむけ、そして、アダムにおいてすべての人間に罪を犯すようにしむけられた。それは、すべての者が罪人

となることによって、創造の時に、神があらかじめ地獄に落とすことと決めておかれた者たちを、実際に地獄に落とすことで神の義があらわれるためであつた。また、神は、創造の時にあらかじめ救うことに決めておかれた者たちだけの贖いのため、イエス・キリストを遣わされた。」(「論考一3」)²⁾このような説は、まったく誤りに満ちているとパスカルは批判する。(「論考一3」)³⁾

パスカルは、神の恩寵と人間の自由意志の問題に関して広く行われているのは3つの説であるとして、まず、カルヴィニストの説は「何とも恐ろしく、被造物に対して残忍な神の姿を見せつけ、耐えられぬばかりの激しさで、精神を打ちのめす」と述べ、これに反して、モリニストの説は「何とも柔弱で、一般人の感覚にもぴったりきて、この上なく快適で、魅力的である」と言い、教会の見解は「その中間を占め、カルヴァンの説ほど残忍でもなく、モリナの説ほど柔弱でもない。しかし、真理の問題は、うわべによって判別してはならないのであるから、この3つの説を根本的に検討してみなければならぬ」としている⁴⁾。

そして、カルヴィニストとモリニストの2説の「中間を占める」のは「教会の見解」であり、これはまた、恩寵に関するアウグスティヌスの説でもある。「まず第1に言いたいことは、今日、聖アウグスティヌスの教えを支持される、学識豊かな、高名な方々が多数おられるという点である。この方々は、神が、ご自身の教会に対して格別な賜物として、とくにこの時代にお与えになった方々である。」(「論考一21」)⁵⁾

モリニスト、カルヴィニストのそれぞれの教説に対する、このパスカルの捉え方は的確なものであるかどうかという問題が起こる。相手の特色をとらえて批判、非難する論争では、特色が過度に強調されすぎることしばしば起こる。『プロヴァンシアル』論争においては、ジェズイットが、アルノー、ニコルなどジャンセニストや『プロヴァ

5) *Lettre* [4] 9, 『MP全集』p. 113. *OCL*, p. 330, cf. 『P著作集』V, p. 216. その他、「手紙II」「手紙VI」にも見出される。

1) *OCM*, III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [1] 1. cf. 『MP全集』II, p. 180.

2) *OCM*, III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [2] 3. cf. 『MP全集』II, pp. 180-181.

3) *OCM*, III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [1] 3. cf. 『MP全集』II, p. 181. *OCL*, p. 314, 『P著作集』V, pp. 148-149.

4) Cf. *OCM*, III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [1] 4. 『MP全集』II, p. 181. *OCL*, p. 314, T. t, V, pp. 148-149.

5) *OCM*, III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [1] 21. cf. 『MP全集』II, p. 184. *OCL*, p. 315, 『P著作集』V, p. 153.

ンシアルの手紙』の著者を、カルヴァン、カルヴィニストと同じ異端であると非難しているの、その非難に反駁するために、カルヴァン、カルヴィニストとの違いを過度に主張することも起こるであろう。

『恩寵の教理』の著者、ジャン・ラポルトは次のように指摘している。

ポール・ロワイヤルの神学者たちの教説が、プロテスタントやモリニストの教説と異なるとの主張は、しばしば議論の対象になってきた。ドシャン神父、あるいは、マルブランシュ、または、フェヌロンのような神学者だけでなく、サント・ブーヴのようなポール・ロワイヤルの歴史家によってさえも議論されてきた。やや広く受け入れられている意見によれば、ポール・ロワイヤルの教理は、アルノーの論敵が非難するようなカルヴィニズムの「再現」ではないにしても、少なくとも、セミ・カルヴィニズムである。ジャンセニウスやアルノーやポール・ロワイヤルの神学者がルター派やカルヴィニストとの違いを示そうとする時、あまり正確な仕方ではない。一部の語句にこだわって、異端的な意味を誇張している。ルターやカルヴァンの意味を実際に調べてみると、ジャンセニウスやその弟子たちの意味と何ら変わらない。カルヴィニズムやモリニズムのイメージを多少とも歴史的に忠実に描くことは、ポール・ロワイヤルの神学者、アルノーにとっては2次的なことであった。彼が関心を持ったのは、ルターやカルヴァンが何を考えたかではなく、彼自身がこの問題で考えなくてはならないことを明確にすることであった。カルヴィニズムやモリニズムという語は、1つの定まった教理的内容をもつ立場を示すものとして理解していたのであろうと⁶⁾。

パスカルの理解も、当然アルノーやニコルのこうした考え方の影響を受けている。彼が言う「2つの誤り」も実際の、カルヴァンやルターの説、カルヴィニズムやモリニズムと乖離があるであろう。本書では、われわれはジェズイットの指摘している、『プロヴァンシアルの手紙』の著者とカ

ルヴァンの一致、または、同類という点に限定して検討してゆきたい。

2) カルヴァンの『キリスト教綱要』におけるアウグスティヌス

ニーゼルの『カルヴァンの神学』⁷⁾とともに第2次大戦後のカルヴァン研究の出発点と評せられる『カルヴァン 彼の宗教思想の源泉と展開』の著者、フランソワ・ヴァンデルは、「カルヴァン神学の多くのニュアンスや、さらに全般的に、彼の宗教的精神の根源を探らなければならないのは、聖書、ことに、預言の書とパウロ書簡を熱心に読書している点である。彼が聖書を研究し、解釈したのは、自由な立場にある学者としてではなく、アウグスティヌスやルターの読者として、また、教義学的立場を確保しようとする神学者としてであったという視点を見失ってはならない⁸⁾と指摘し、さらに次のように述べている。「[カルヴァンは初期においてクリュソストモスを好んだが]しかし、アウグスティヌスのカルヴァンへの影響ははるかに重要であり、また、ユニークなものであった。カルヴァンは絶えずアウグスティヌスを読書し、真にアウグスティヌスと同質と感じている。カルヴァンはアウグスティヌスをたえず引用し、アウグスティヌスの表現を自分のものとし、論争において最も貴重な味方のひとりとみなしている⁹⁾と述べている。カルヴァンはアウグスティヌスが聖書解釈で用いている寓意的解釈を遺憾に思っても、しかしながら、聖書の忠実な解釈者とみなしている。教理的な面では、カルヴァンはアウグスティヌスから得られるものをすべて得ている。カルヴァンは自由意志と聖礼典の教理においてアウグスティヌスから着想を得、恩寵と予定論の章では、アウグスティヌスの議論全体を自分のものとしてとり入れている。『予定論』では次のごとく書いているほどである。「アウグスティヌスは私たちとあらゆる点でよく一致しているので、もしもこの問題で私が『信仰告白』を書かねばならないならば、彼の著書から引き出した

6) LAPORTE, Jean, *La Doctrine de la Grâce*, p. 25, n. 199.

7) NIESEL, Wilhelm, *Die Theologie Calvins*, München, 1957. 邦訳 渡辺信夫訳、新教出版社。

8) Cf. WENDEL, François, *Calvin, source et évolution de sa pensée religieuse*, p. 89.

9) Cf. *Ibid.*, p. 90.

証言を組み立てるだけで十分であろう」。これほどの深い一致は、神学的問題を考える共通の方法によってしか説明され得ないとヴァンデルは指摘している。

以下、古代教会、および、アウグスティヌスに対するカルヴァンの評価を概観したのち、われわれはカルヴァンにおけるアウグスティヌスの著作の引用を調べる。

(1) カルヴァンにおける古代教会の権威

福音主義の教義は、原始キリスト教と断絶していない。逆に、福音主義は原始キリスト教への回帰である。この表現の仕方は、宗教改革陣営にとって2つの利点を持っていた。1つは、キリスト教の教義的遺産に持ち込んだ教皇庁の逸脱を受け入れることを拒否する正当な権利を、宗教改革は一挙に確保したことであり、他の1つは、聖書の自由な吟味、解釈による分裂を終結させる信仰告白の意味と価値を、宗教改革者自身に与えたことである¹⁰⁾。この2つの利点が得られたにもかかわらず、カルヴァンは古代教会には相対的権威しか与えていない。彼にとっては、聖書が啓示の唯一の源泉であり、書かれたみ言葉に付加したり、削除したりすることはすべて、全く人間の発明であって、真の信仰者にとっては価値がないと主張した。公会議に関しては、5世紀までの公会議は「聖書的」と認められ、したがって、カルヴァンの考慮に値した。以後の公会議は、彼の意見によれば、福音の純粹性からかけ離れているので、あらゆる権威を欠いている。教父と公会議は、聖書に忠実な限りにおいて権威がある。これはカルヴァンがアウグスティヌスを比類なき権威と認める動機そのものである¹¹⁾。

(2) カルヴァンにおけるアウグスティヌスの権威

古代教父たちのうちにアウグスティヌスに匹敵する権威を持つ者はいないとカルヴァンは言う。アウグスティヌスは時たま、聖書の「福音的」解

釈をなおざりにしているが、そういう場合は例外的であって、また、2次的な教義に関してである。カルヴァンは基本的なすべての問題に関して、アウグスティヌスに一致を感じている。カルヴァンのアウグスティヌスに対する高い評価は、結局のところ、アウグスティヌスの著作が表している「福音的」性格である。カルヴァンは古代の博士たちの思想を長々と研究することは余計であると判断した。なぜならば、アウグスティヌスだけで十分だからである。それゆえ、カルヴァンは古代の思想をさらに知ることを望む読者に対して、アウグスティヌスの権威を参照して示した。カルヴァンにとっては、アウグスティヌスの権威のみがかなる論争を解決するにも十分であり、アウグスティヌスの著作を援用することは古代教父の正統的教えを確信を持って知らせることを意味していた¹²⁾。

3) 『キリスト教綱要』におけるアウグスティヌス

カルヴァンの宗教思想を集大成したものは、いうまでもなく『キリスト教綱要』である。1536年に初版本が小型の1冊本、516ページで出版され、以後、版を改めるごとに、増補をし、第5版、最終版は4書で構成される大著となったが、初版から最終版に至るまで、圧倒的に引用されているのは、聖書を別にすると、アウグスティヌスである。渡辺信夫編『キリスト教綱要』「引用文解題」によれば、「アウグスティヌスの著作からの引用は、『綱要』において最も頻繁である。カルヴァンの用いた版は1506年バーゼル（第2版1515年パリ）刊のアメルバッハ編の9冊本か、1528-29年エラスムスによってバーゼルから出された10冊本である」¹³⁾とあり、77冊のアウグスティヌスからの引用著書が挙げられている。

ヴァンデルは『キリスト教綱要』の最終版（1559年版）において、アウグスティヌスからの引用を341数えている¹⁴⁾。カルヴァンの著作におけるアウグスティヌスについて最も詳細な優れた調査研

10) SMITS, Luchsius, *Saint Augustin dans l'œuvre de Jean Calvin*, p. 254.

11) *Ibid.*, pp. 258-259.

12) *Ibid.*, p. 250.

13) 『キリスト教綱要』別巻 p. 90.

14) WENDEL, *op. cit.*, p. 238.

究をなしたスミッツは、初版本においてすでに、引用、参照合計134を数え、第2版(1539年版)において、345を数えている。そして、最終版、第5版まで、その数が増して行くことを指摘している¹⁵⁾。数において圧倒的にであるだけでなく、前述の如く、カルヴァンは中心的な教理において、アウグスティヌスを援用して、『キリスト教綱要』を著述し、ジュネーブの宗教改革事業を推進し、フランスの改革派教会を指導する最高の神学体系を構築したのである。

『キリスト教綱要』には、以下のような引用がアウグスティヌスの著作からなされている。

自由意志に関しては、(「第2編 第2章」)「人間は、今や、自由意思を奪われ、悲惨な奴隷の位置に、おかれている」の「8. アウグスティヌスの説教」では、意志が「罪については奴隷的である」という1節をカルヴァンは引用している。

アウグスティヌスはこの意思を「奴隷的」と呼ぶことをためらわない(「ユス駁論」第2巻)。彼は、別のところでは「意思」が「自由」であるのを否定する者らに対して怒っている。けれども、その特別な理由を述べて言う。「それは、だれかが意思の[自由な]決定を否認することによって、罪の言い逃れをしようとするのではないためだけのものである」と(「ヨハネ伝説教」第53)。しかも、他のところで、彼ははっきりと告白して、「人間の意思は御霊なしでは、束縛者また征服者たる情欲に隷属するがゆえに、自由ではない」といっている(アタナシウスへの「書簡」第144)。同じく、「意思がおちいったところのその悪徳に打ち負かされたとき、われわれの意思は自由を喪失し始めた」(「人間の義の完全について」)。(『綱要』II, 2, 8)¹⁶⁾。

「27. 意志がそれ自体では善を欲することができないのを聖書と教父によって論じる」。アウ

グスティヌスの言葉を重んじよう。「神は一切の事柄において、あなたに先行したもう。あなたは、いつか、彼のみ怒りに先行してみよ。どのようにしてか、あなたはこのような一切のものを神から受けており、およそ善きものはみな神から来、およそ悪なるものはみなあなたからのものであると告白することによって」と。そのしばらくあとで、また、こう言われている「われわれのものとしては、罪のほか何もない」と(「使徒の言葉についての説教」第10)(『綱要』II, 2, 27)¹⁷⁾

「第3章 人間の腐敗した本性からは、罪せらるべきもののほか、何一つとして生じない」[10. 意思が自由に選択する余地はない]から、次のような引用がある。

「すべて私の父から聞いたものは、私に来る」とのキリストのみ言葉(ヨハネ6:45)は、神の恩寵がそれ自身としてわざを完成する力を持つ、ということを教えたもうものとしか受け取れない。これはアウグスティヌスが主張しておりである(「聖徒の予定について」の書)。(『綱要』II, 3, 10.)¹⁸⁾

アウグスティヌスは、[善を]意志することの幾分かの部分で自分自身のものとして主張する人たちを当然あざ笑い、同じように、恩寵の選びの証としての特殊な賜物が無差別に万人に与えられると考える者らを非難している。(いわく)「本性はすべての人に共通である。しかし恩寵はそうでない」と。(『綱要』II, 3, 10.)¹⁹⁾

「11. 耐え忍ぶことも恩寵である」では、カルヴァンは意志には自己固有のものが残されていないことに注目している。

アウグスティヌスは別のところで「神の多くの賜物は、人間の善き意志に先立つ、そして

15) SMITS, Luchsius, Cf. *op. cit.*, chapitre II., Article I.

16) *Ins.* II, 2, 8.

17) *Ins.* II, 2, 27.

18) *Ins.* II, 3, 10.

19) *Ins.* II, 3, 10.

人間の善き意志そのものも、神の賜物のうちにある」といっているが、これは同じことを言おうとしたものである。したがって、「意志」には自己固有のものだと主張すべき何ものも残されないことになる。(『綱要』II, 3, 11.)²⁰⁾

「12 恩寵なくしては、善きわざの片鱗をも行なうことはできない」を引用して、カルヴァンは「神の憐れみ」が人間の意志を導くことを指摘する。

「『神の憐れみが私にともない来る』(詩篇23:6)と書かれているのであるから、神の憐れみは意志しない者を出迎えて意志させ、意志する者にともなって、その意志するところがむなしくならぬようにするのである」。(『綱要』II, 3, 12.)²¹⁾

「13 アウグスティヌスの証言」では、恩寵に従う意志は恩寵が創造したものであることにカルヴァンは注目している。

アウグスティヌスの語る言葉を聞こう。これは、われわれの時代のペラギウス派、つまり、ソルボンヌの詭弁家たちが、古代のすべての教師たちも私たちに反対していると——彼らの流儀にのっとなって——非難を浴びせる余地を持たないためである。この点について、彼らはその父ペラギウスに実によく見習っている。このペラギウスのために、昔、アウグスティヌスは闘技場に引き出されたのである。さて、この問題については「ヴァレンティヌスに与える書。譴責と恩寵について」という書物の中に、詳細に述べられている。私は、それをここに簡単に、しかし彼の言葉のままに引用しよう。彼はこう言っている。「もしアダムが[それを用いることを]意志したならば、耐え忍んで善を行なう恩寵は彼に与えられたのだ。われわれにはこれが与えられ、それによってわれわれは意志し、また意志に

よって情欲を克服するのである。」(...)²²⁾

アウグスティヌスはさらに詳しく立ち入って論じ、われわれの心が、どのようにして、神の働きかけたもうとき、それに必然的に従うのかを説いて言う。

「まことに、主は人々を彼らの意志によって[強制でなしに]引き寄せたもうが、その意志自体が神によって造られたものである」と。(...) 恩寵が主からさし出されるのは、ただ、おのおのが自分の自由な「選択」によって、あるいは受け入れ、あるいは退けることができるようなふうではない。むしろ、この恩寵そのものが、心のうちに「選択」と「意志」とをつくり、そこから、これに続いてくる善きわざは、みな、この実りであり、結果だというふうにある。また、恩寵に従う意志は恩寵が創造したものにほかならないのである。すなわち、この教師は、他のところでもこう言っているのである。「われわれのうちにおける、いっさいの善きわざで、恩寵によらぬものはない」(『書簡』第105)(『綱要』II, 3, 13.)²³⁾

「14 アウグスティヌスは意志をまったく恩寵に依存させている」では、カルヴァンはアウグスティヌスの言葉を解釈して、「人間は心のうちに何の動機もないままに、いわば外からの衝撃によって持ち運ばれるかのように、引き行かれるのではない。(...) 心の底から従うように、内的に感動させられるのである」と述べている。

彼は別の箇所でも「意志は恩寵によって取り去られるのでなく、悪から善に変えられる。そして善にされた上で、助けを受ける」と言っている。これはただ次の意味を持つだけである。すなわち、人間は心のうちに何の動機もないままに、いわば外からの衝撃によって持ち運ばれるかのように、引き行かれるのではない。そうではなく、心の底から従うように、

20) *Ins.* II, 3, 11.

21) *Ins.* II, 3, 12.

22) *Ins.* II, 3, 13.

23) *Ins.* II, 3, 13.

内的に感動させられるのである。恩寵が特別に、また価なしの賜物として、選ばれた者らに与えられることについて、彼は、次のようにボニファキウスにあてて書いている。「われわれは神の恩寵がすべての人々に与えられるのでないことを知っている。そして、これを与えられる人は、行ないの功績に応じて与えられるのでもなく、価なしの恵みとして与えられるのである。そして、これを与えられない者は、神の義なるさばきによって与えられないのだということも、われわれは知っている」（『書簡』第106）（『綱要』Ⅱ, 3, 14.）²⁴⁾

そのところで、彼 [アウグスティヌス] は第1にこう教える。「人間の意志は、自由によって恩寵を獲得するのではなく、恩寵によって自由を獲得するのである」。^[第2に]「意志はこの恩寵によって [善に適合させられ] これを喜びをもって愛し、それを堅持し続けるようにされる」。^[第3に]「意志は [悪に立ち向かうために] 抜くことのできない強さで強化される」。^[第4に]「意志は恩寵によって支配される限り決して倒れず、恩寵から見放されたならばたちまち衰える」^[同じく]「主の価なしの憐れみによって、意志は善へと回心させられ、回心させられることによって、ここに立ち続ける」。^[同じく]「人間の意志は善に向けて導かれ、これに導かれたのちはここにとどまり、ただ神の意志にのみよりすがって、何ひとつ己の功績により頼まないのである」と。このように、人間に残っている「自由意志」（そう呼んでみたいならば）なるものは、彼が他のところで書いているように、恩寵によってでなければ、

神に向くこともできず、神のうちにとどまることもできないようなものにすぎない。意志のないうるあらゆることは、みな、恩寵のみによってないうるのである（『書簡』第46）。（『綱要』Ⅱ, 3, 14.）²⁵⁾

以上、カルヴァンは強く共感し、賛意を表しながらアウグスティヌスから引用して論じている。表現が似ているだけにとどまらず、聖書に根本的な根拠を持つだけでなく、福音的聖書解釈という共通の方法論を両者は持っている。「人間は心のうちに何の動機もないままに、いわば外からの衝撃によって持ち運ばれるかのように、引き行かれるのではない。そうではなく、心の底から従うように、内的に感動させられるのである。」と述べるアウグスティヌスにカルヴァンは全く同意している。パスカルが非難するごとく、「石か鋸のごとく、機械的に引っ張っていかれる」のでは、決してない。

カルヴァンの忠実な後継者たち、カルヴィニスト、改革派教会の神学者たちは、救いはただ神の恩寵のみによると主張するが、人間の側のいきいきとした信仰の働きにも注目し、「聖徒の堅忍」つまり、「父なる神の有効召命と聖霊の内住によってキリストに結合された聖徒は、最後まで堅忍する」²⁶⁾ことを主張している。パスカルが非難し、異端視する「機械的に救いに、あるいは、遺棄に引っ張っていかれるのではない」²⁷⁾。

ヴァンデルヤスミッツが精密な研究によって指摘しているごとく、また、『キリスト教綱要』における上記の引用でも推測できるように、アウグスティヌスは、カルヴァンに重要な影響を与えた。とりわけ、人間の本性の堕落、人間の自由意

24) *Ins.* Ⅱ, 3, 14.

25) *Ins.* Ⅱ, 3, 14.

26) ジョン・マーレー著『キリスト教救済の論理』松田一男訳、小峯書店、1972年、p. 142

27) 「契約という聖書理念が意味深いものとして神学者たちに注目されたのは、16世紀の宗教改革の時からであり、恵みの契約が一つの教理として発展させられてきたのは、17世紀のいわゆる契約神学においてである。」（『松田一男神学論文集』日本基督改革派板宿教会、1994年、p. 15.）「恵みの契約」に関しては、同書、pp. 15-49. に詳しく論じられている。

「神の恵みによる選民の保持の業が聖徒の信仰の堅忍なしにあたかも自動的に存在するかのよう考える過つた理解に対して注意する必要がある。神の恵みによる聖徒の保持を堅く信じ、恵みの手段を勤勉に用い、忍耐のうちに信仰に堅く立ち続けることがもとめられる。大切なことは、＜選びの確かさ＞の問題と＜信仰のヴァイタリティ＞すなわち、＜信仰の働きとしての生き生きとした信仰の喜び＞の問題とを区別すること。もちろん両者は密接に関係している。」（牧田吉和著『慰めと希望の教理としての改革派予定論』日本基督改革派教会憲法委員会、1996年、p. 126）

志と神の恩寵、予定論に関しては、カルヴァンはアウグスティヌスの忠実な弟子であると言えるであろう。自由意志に関しては、パスカルもカルヴァンも共に、アウグスティヌスという、大きな、同じ源泉を持っており、両者とも、聖書に次いで、アウグスティヌスをもっとも重要視していたと言えるであろう。

主要参考文献

- *Annuaire Litteraire Provinciale Franciae Ad annum Christi 1656*- Roma, ARCHIVUM ROMANUM, SOCIETATIS IESU, 6 feuilles (6 pages)
Pascal (Blaises), *LETTRÉ A VN PROVINCIAL*, *Edition princeps*, 1656—1657.
- *Les Provinciales*, Cologne, 1657 (398—111 p.)
- *Les Provinciales*, Cologne, 1657 (396—108 p.)
- *Œuvres complètes*, Paris, Hachette, (Grands Ecrivains), éd. Brunschvicg, 1904—1914, 14 vol. in-8°. (略号 *GE*. ローマ数字は巻数を表す.)
- *Œuvres complètes de Blaise Pascal*, (Aux Editions de Seuil), 1963. (略号 *OC*.)
- *Œuvres complètes de Blaise Pascal*, I—IV, éd. de Bibliothèque Européenne, 1964—1992, (略号 *OCM*.)
- *Les Provinciales*, Paris, Garnier, éd. L. Cognet, 1954, 503 p. in-8°. (略号 *PC*.)
- 『パスカル全集』Ⅱ、(人文書院) 岳野慶作、安井源治訳
- 『パスカル著作集』Ⅲ, Ⅳ, Ⅴ, (教文館) 田辺保訳 1980—1983 (略号『P著作集』)
- 『メナール版 パスカル全集』(白水社)Ⅱ 望月ゆか訳, 1994. (略号『MP全集』)
CALVIN, Jean, *Institution de la Religion chrétienne*, I—IV, Les Belles Lettres, 1936—1938. (略号 *Ins*.)
- カルヴァン『キリスト教綱要』渡辺信夫訳、新教出版社 1962. (略号『綱要』)
- *Réponses aux “Lettres Provinciales” publiées par le secrétaire de Port-Royal contre les PP. de la Compagnie de Jésus*. 『イエズス会の神父に対して反論して、ポール・ロワイヤルの書記が出した「プロヴァンシアルの手紙」に対する回答』(Par de PP. Jacques Nouet, François Annat, de Lingendes et J. Brisacier) Liège, 1656. Bibliothèque Nationale (Cité : BN) [D. 12353.
- *La Bonne Foi des Jansénistes en la citation des auteurs, reconnues dans les lettres que le Secrétaire du Port-Royal a fait courir depuis Pasques*, (『復活節以来、ポール・ロワイヤルの書記が流布させたなかに見られる諸作家引用のさいの、ジャンセニストの不誠実』) Par le P. Annat, de la Compagnie de Jésus. A Paris,. 1656. BN. [D. 4406.
- *Apologie pour les casuistes contre les calomnies des Jansénistes. ...par un théologien*. (『ジャンセニストの中傷に対する、ある神学者による良心例学弁護論』)
- R. P. Rapin, *Mémoires*, II
- NIESEL, Wilhelm, *Die Theologie Calvins*, München, 1957.
- WENDEL, François, *Calvin, source et évolution de sa pensée religieuse*, PUF., 1950.
- SMITS, Luchesius, *Saint Augustin dans l'œuvre de Jean Calvin*,
- LAPORTE, Jean, *La doctrine de la grâce chez Arnauld*, 1922;
- *La doctrine de Port-Royal*, 1923, 4 vols.
- MESNARD, Jean, *Pascal*, 1951;
- *Pascal et Roannez*, 1965.
- SELLIER, Philippe, *Pascal et Saint Augustin*, 1970.
- MIEL, Jan, *Pascal and Theology*, 1969.
- 森川 甫『フランス・プロテスタント苦難と栄光の歩み—ユグノー戦争、ナント勅令、荒野の教会—』改革派教会西部中会文書委員会、1999,
- MORIKAWA, Hajime, *Annuaire Litteraire Provinciale Franciae Ad annum Christi 1656*—パスカルの『プロヴァンシアルの手紙に関連して—』「社会学部紀要」第63号 関西学院大学 1991.
- *Annuaire Litteraire Provinciale Franciae Ad annum Christi 1656*, —concernant *Les Lettres Provinciales* de Blaise Pascal—, *Etudes de Langue et Litterature Françaises* N° 60, 1992
- *Annuaire Litteraire Provinciale Franciae Ad annum Christi 1656* とパスカルの『プロヴァンシアルの手紙』『ガリア』XXXI, 大阪大学フランス語フランス文学会 1992
- *LES LETTRES PROVINCIALES DE BLAISE PASCAL ET ANNUÆ LITTERÆ PROVINCIAE FRANCIAE AD ANNUM CHRISTI 1656*, Kwansei Gakuin Annual Studies, Vol. XLIII, 1994.
- ARNAULD, Antoine *De la Fréquente Communion ou les Sentiments des Pères, des Papes ...*
AUGUSTIN (saint), *Œuvres complètes* de saint Augustin, traduites en français et annotées par MM. Péronne..., Paris, 34 vols.
COGNET, abbé Louis *Les origines de la spiritualité française au XVIIe siècle*, 1948, *La Mère Angélique et son temps*, 2 vols, 1950 et 1952,
— *Le Jansénisme*, 1964.

Pascal's Doctrine of Grace

— Concerning that of Saint Augustine and of Calvin —

ABSTRACT

As shown in No.85 of our Review, Pascal gives a complete accordance with Saint Augustine's doctrine of God's grace, and denies that of Calvin's doctrine. But, Calvin quotes many passages on the grace of God, in his principal work, *Institution de la Religion Chrétienne*, from Saint Augustine's writings. Calvin used them to establish his theological system. And scholars have admitted that Calvin is Saint Augustine's disciple in Christian doctrines, above all, the doctrine of grace. Nevertheless, Pascal emphasized a different perspective from that of Calvin. On examining the doctrine of those two, we cannot find important differences, rather there are similar qualities. To explain this inconsistency, we could hypothesize that it was Pascal's effort to avoid the reproach of Jesuits, that is to say, Port-Royal and Calvin are guilty of the same heresy.

Key words: Calvin, St. Augustine, grace